

公益財団法人 イオンワンパーセントクラブ

第23回 中学生作文コンクール



受賞者と審査員のみなさんで記念撮影

文部科学大臣賞

福岡県 直方市立直方第二中学校2年

いけだ けんしん
池田 健心

環境大臣賞

神奈川県 鎌倉市立手広中学校3年

はらさわ ゆき
原澤 幸希

イオンワンパーセントクラブ賞

広島県 英数学館中学校3年

ふじた たかひろ
藤田 崇弘

優秀賞

東京都 東京学芸大学附属世田谷中学校2年

おおた あやね
太田 綾音

広島県 広島市立国泰寺中学校3年

こばやし はな
小林 巴菜

愛知県 名古屋市立大曾根中学校3年

さかきばら たくみ
榎原 托純

愛媛県 愛媛大学教育学部附属中学校2年

ひづま しげな
弘松 詩菜

宮崎県 都城市立姫城中学校3年

ほんごう ゆうと
北郷 優斗

福島県 いわき市立泉中学校3年

まつうち りお
松浦 里緒

東京都 東京学芸大学附属世田谷中学校2年

やまだ あいか
山田 愛華

入賞

東京都 学校法人北豊島学園北豊島中学校1年

おおた あやね
太田 綾音

福岡県 福岡市立高取中学校2年

こばやし はな
小林 巴菜

鹿児島県 薩摩川内市立東郷学園義務教育学校3年

いながき ななこ
稻垣 奈名子

広島県 広島市立広島中等教育学校2年

こうがわ ゆき
後川 優紀

岩手県 岩手県立一関第一高等学校附属中学校2年

うと ちはる
宇都 千遙

静岡県 静岡市立城内中学校3年

おの りんか
小野 薫花

東京都 学習院女子中等科2年

おの かなと
小野寺 奏和

京都府 京都市立太秦中学校1年

こはら りおり
小原 莉緒

大阪府 大阪市立北稟中学校1年

たけうち あかり
竹内 あかり

大阪府 大阪市立北稟中学校1年

たけうち あさみ
竹鼻 麻実

東京都 練馬区立北町中学校3年

ちん くにゆめ
陳 国栄

千葉県 我孫子市立白山中学校1年

どみ こころ
土井 こころ

沖縄県 昭和薬科大学附属中学校2年

とみ ひさ
富久 真斗

北海道 鹿追町立鹿追中学校3年

ながの はるき
長野 邋貴

東京都 板橋区立桜川中学校2年

にい かの
服部 華乃

兵庫県 学校法人須磨学園須磨学園中学校1年

はんどう あやの
藤 冬乃

東京都 ドルトン東京学園中等部2年

やまうち ななこ
山内 南都子

長野県 山ノ内町立山ノ内中学校3年

やまぐち りおり
山口 庭來

広島県 広島市立三入中学校3年

よこた はるえ
横田 梨緒

受賞おめでとうございます



文部科学大臣賞を受賞した池田健心さん

「第23回中学生作文コンクール」(公益財団法人イオンワンパーセントクラブ主催)の表彰式が、昨年11月22日にホテルメトロポリタンエドモント(東京・飯田橋)のクリスタルホールで開かれました。

今回のテーマは「未来へつなぐ、わたしのエコ活動」。応募総数は過去最高となる1万7122点の中から、文部科学大臣賞などを含む30作品が選ばれました。

表彰式は主催者を代表して、イオンワンパーセントクラブ渡邊廣之理事長のあいさつから始まりました。

「ごみ問題は想像力の欠如に過ぎない」。街に投げ捨てられたペットボトルが海を汚していること、生ごみの水分を絞らずに収集に出すことは悪臭の元になるばかりか、清掃員の作業着を汚すこと、余つたら捨てればいやともったた物や食品が大量のごみを生んでいることなど、日常生活におけるごみ問題を浮き彫りにした滝沢さん。またのリユース、使い終わったカゴ口や上履きのリサイクルは、日ごろの意識です」とメッセージを伝えました。

お笑い芸人で、ごみ清掃員のマシンガンズ滝沢秀一さんが、ごみ収集の仕事を通して得た経験や学びを、笑いを交えながら語りました。

「ごみ問題は想像力の欠如に過ぎない」。街に投げ捨てられたペットボトルが海を汚していること、生ごみの水分を絞らずに収集に出すことは悪臭の元になるばかりか、清掃員の作業着を汚すこと、余つたら捨てればいやともったた物や食品が大量のごみを生んでいることなど、日常生活におけるごみ問題を浮き彫りにした滝沢さん。またのリユース、使い終わったカゴ口や上履きのリサイクルは、日ごろの意識です」とメッセージを伝えました。

表彰式は主催者を代表して、イオンワンパーセントクラブ渡邊廣之理事長のあいさつから始まりました。続いて受賞者一人ひとりに賞状が渡されました。入賞と優秀賞には審査員がプレゼンターとなり、イオンワンパーセントクラブ賞は渡邊理事長、環境大臣賞は文部科学省の黒部一隆さん、文部科学大臣賞は文部科学省の高市和則さんが賞状を手渡しました。緊張の面持ちで壇上に向かう受賞者たちは賞状を受け取った。先生は現在、アフリカのボツワナ共和国で働いていて、一時帰国をしたタイミングだったといいます。感動の再会もあり、温かな雰囲気で、

表彰式は主催者を代表して、イオンワンパーセントクラブ渡邊廣之理事長のあいさつから始まりました。続いて受賞者一人ひとりに賞状が渡されました。入賞と優秀賞には審査員がプレゼンターとなり、イオンワンパーセントクラブ賞は渡邊理事長、環境大臣賞は文部科学省の黒部一隆さん、文部科学大臣賞は文部科学省の高市和則さんが賞状を手渡しました。緊張の面持ちで壇上に向かう受賞者たちは賞状を受け取った。先生は現在、アフリカのボツワナ共和国で働いていて、一時帰国をしたタイミングだったといいます。感動の再会もあり、温かな雰囲気で、

表彰式は主催者を代表して、イオンワンパーセントクラブ渡邊廣之理事長のあいさつから始まりました。続いて受賞者一人ひとりに賞状が渡されました。入賞と優秀賞には審査員がプレゼンターとなり、イオンワンパーセントクラブ賞は渡邊理事長、環境大臣賞は文部科学省の高市和則さんが賞状を手渡しました。緊張の面持ちで壇上に向かう受賞者たちは賞状を受け取った。先生は現在、アフリカのボツワナ共和国で働いていて、一時帰国をしたタイミングだったといいます。感動の再会もあり、温かな雰囲気で、

表彰式は主催者を代表して、イオンワンパーセントクラブ渡邊廣之理事長のあいさつから始まりました。続いて受賞者一人ひとりに賞状が渡されました。入賞と優秀賞には審査員がプレゼンターとなり、イオンワンパーセントクラブ賞は渡邊理事長、環境大臣賞は文部科学省の高市和則さんが賞状を手渡しました。緊張の面持ちで壇上に向か

公益財団法人 イオンワンパーセントクラブ

第23回 中学生作文コンクール



私たちの、たつた一つの地球

直方市立直方第二中学校 2年

池田 健心



雨垂れ石を穿つ

鎌倉市立手広中学校 3年

原澤 幸希



語活動のALTの先生との授業ぐらいしかなかつた私は、世界の国々を知つてゐる人がこんな身近にいるということと、そんな人が自分の担任の先生になるということに驚きを隠せなかつた。なんだか急に、私の世界との扉が開いたような気がした。

四年生の学習が始まると、先生は毎日のように、世界の国々のことを話してくれた。言語や文化、スポーツ。どれも興味深いものばかりだつた。その中でも、特に心に残つたのが、

役所が主催している「環境力レンダー」に取り組み、節水や節電をし、記録をつけて振り返った。高学年に進級すると、地域の清掃活動に参加したり、現在の環境問題のことについてより深く知りたいと思、SSH指定校の高校を訪ねて、環境問題に詳しい高校生に話を聞いたりした。よりも多くの人に現状を知つてもらうため、学んだことを自主学習ノートにまとめて、クラスのみんなに読んでもらつたりした。

私は今、中学二年生になつた。現在も、自分にできる取り

「地球は、たつたつしかないんだよ」。
ある先生との出会いが、私を変えてくれた。

先生との出会いは、私が小学校四年生のときだった。先生は、始業式の日、先生として働くのは初めてだと教えてくれた。それと同時に、先生になるは私たちに語ってくれた。

が起きていること、そして、その問題が深刻化すれば、将来地球はなくなってしまうことを、写真や資料をもとに、先生の話だった。今、地球では、ごみ問題や温暖化の問題、海洋汚染、森林破壊、さまざまな問題

先生は、今はアフリカ南部にあるボツワナという国で先生をしているそうだ。先生が教えてくれたことは、私の人生を変えるきっかけになった。私の小さな行動でも、きっと地球の未来を変えていくと信じている。生物を思いやる心を持つことができれば、みんなが幸せで、平和な地球をつくることにもつながると思う。私は行動を続けたい。たった二つの地球を守つてくために。

組みを続けながら、SSH指定校への進学を目標に、勉強と部活を両立する日々だ。高校では、特に関心のある、海洋プラスチックの問題についての解決方法を探求していきたいと考えている。海は、世界の国々がつつながっている。海の問題について考えることは、地球をまるで考

^{注1}...外国語指導助手、^{注2}...Reduce(リデュース)、Reuse(リユース)、Recycle(リサイクル)の3つのRの総称。^{注3}...スーパーサイエンスハイスクール。文部科学省が指定する、先進的な理数教育を提供する取り組みのこと。

表彰式に恩師の先生が来てくれて、一緒に写真を撮ったことがうれしかったです。「エコルとごし」では、「たった1秒の間に世界の環境がどう変化するのか」という展示が心に残りました。いい賞をもらい、楽しくて光栄な2日間でした。



でもこれでは何も変わらぬまま、いと勇気を出し活動家の方に相談した。緊張していたがノートを見せた事で思いが伝わりSNSで私の活動を紹介して下さった。こうして学校と家だけの世界から大きな世

その言葉が次に繋がり、国際環境会議や多くのメディアで発表する機会を頂いた。そして活動を知った鎌倉市が動いて下さり、私の学校でプラスチックを分解する実験を行う事になった。その後遂にプラスチックを分解する新種の微生物だ我武者羅で、効率は悪かつたかもしれないが何があつても「やめない、続ける」と小さい事を重ね、少しづつ自分にできる事の幅を広げた。小さな事でも統ければ変化を起こせるのだと、皆に知つてもらいたい。これが今の私の目標だ。

直接飲む事にした。最初は恥ずかしくて自分の長い髪で隠していた。そんなの意味がない、汚いと言われ泣いて帰った日もあつたがやめたくなかった。この問題を図書室で調べ、大学教授や研究者のセミナーに参加しノートにまとめた。海洋ごみの8割は陸上からと知り、登下校中にごみ拾いを始めた。

レポートがSDGs作品大賞で大賞を受賞し、黒岩知事や県の首長の方々に活動を知つて頂けた。これを機に講演会で発表する事になった。人前で話す事が苦手な私には大きな挑戦だが、思いを伝えたくて何度も練習した。給食のストロー変更には大人の力が必要です、力を貸して下さいと。その言葉が次に繋がり、国際

ると実感した。実際始めた時は何かしなければという衝動で、動機なんて後付けだ。ただ楽しくて活動を続けていた。初めから大きな理想を描く計画的行動は効率が良い。でも実際は計画通りいかない事の方が多く、理想への道のりの長さに挫折する人もいるだろう。私はゴールもわからずただ我武者羅で、効率は悪かつた。

小学三年生の時にダボス会議を見てプラスチックごみ問題を知り、何の疑問も持たず使って捨てていた物が地球を壊していたなんてと衝撃だった。私も何かできないかと翌日から給食のストロー不使用を決め、先生に許可を得てクロプラスチックの間を泳ぐアランクションが見えた。これを食べたら食物連鎖に影響が出る。怖くなつた。これは本の中の話ではなく現実なのだ、たつた一本のストローを使わないと、環境大臣との面会を果たした私を、あの頃私は想像出来ただろうか？

教科書では伝わらないこの現状を私が伝えなければ、ポスターを作り学校に掲示した。誰かに届き、社会を変えられ

私は人前に立つ事が苦手だ。皆をまとめ、巻き込める力は無い。でもこのまま何もしないのは嫌だ。ならば一人でも動き出せば良い。

界へ広がっていく。「自分の目で確かめてごらん」と言われ、ヨットで東京湾マイクロプラスチック調査を行った。顕微鏡で多くのマイ物が発見され、更に鎌倉市の公立小中学校でプラスチックストローを廃止し、100%生分解性ストローへの変更が決まった。想像も出来なかつ

廣雅

受賞した
感想

ストロー1本の小さな活動がすごい賞に選ばれて、とてもうれしかったです。表彰式に全国から集まつた中学生の作文について知ることができ、環境問題を考えたり行動したりするたくさんの仲間がいるのだと思いました。

公益財団法人 イオンワンパーセントクラブ

第23回 中学生作文コンクール



海のゆりかご大作戦

英数学館中学校 3年

藤田 崇弘



今、私の住む瀬戸内海で何が起こっているのか。私は知らなければならぬ。そして行動しなければならない。

家族で潮干狩りに行つた思い出は楽しくも苦い思い出になつた。なぜならつもアサリが採れなかつたからだ。昔は採れていたのに何故採れなくなつたのか。インターネットで調べてみた。すると地球温暖化が原因だということが分かつた。地球温暖化で水温が上がつてることは耳にするが、水温が上がることで何が起こるのか。海の生態系との関係が分からず、私はモヤモヤした気持ちを抱えていた。

そんな時、地元の漁業組合の方と海の環境について考えるイベントに参加する機会を得た。そこで、海藻が急速に消えていることを知つた。水温上升で藻が育たない、もしくは私が原因だろうと疑つた。しかし違つた。

「食害だ。今、食害が起きている。今すぐ行動しなければならない」

漁師のおじさんの叫びともいえる言葉だつた。私は背筋が伸びた。水温が高い海域に生息するアイゴという魚が瀬戸内海で大繁殖している。アイゴは藻を好んで食べ尽くし、海藻が消えことで食物連鎖が崩れ、魚もアサリも減ってしまったのだ。

私はこの事実を知り、魚の住処や産卵場所となる「海のゆりかご」と呼ばれるアマモを育てる活動に参加した。まず、海の環境を知るため、地引網を行つた。期待は裏切られ、網にかかつたのは大量のごみだつた。怒りと落胆でやる気を失いかけていたが、目の前に広がる深い青の海を見たら力が湧がした。

いた。そして浜辺の清掃活動から始め、いよいよアマモの養殖に取りかかつた。

漁業組合の人が船で雨の中、アマモを採りに沖合へと船を出してくれた。そして一ヶ月間、玉ねぎネットに入れて海水につける。引き揚げたアマモの種子をピンセットで選別する。その作業は気が遠くなるほど

根気が必要だつた。さらに二ヶ月低温で熟成させる。最終段階は種子を堆肥入りの土に混ぜ込む。その土でなんとアマモの種子入り泥団子を作るのだ。できたアマモ泥団子をガゼに包み、弁当箱が入るくらいの大きさの竹籠に入れて、海に沈める。播種をみんなで願つた。

半年後、漁業組合の方が海中写真を見せてくれた。根を張り、黄緑色に揺れる海のゆりかごの姿に生命力を感じた。愛おしかつた。私は紙粘土団子で失敗したことや、悪天候で全部流されてしまった無力感や苦労も全部報われた気がした。

しかしある日、環境問題の記事を読んでいたとき、目に飛び込んできた一文によつて、その信念が大きく揺らいだ。

「アクリルたわしはマイクロプラスチックの原因になる」頭の中に冷水を浴びせられたようだつた。石油でできているアクリル毛糸は、洗うたびに繊維が抜け、排水に流れ出してしまふ。それがやがて海へ届き、魚や鳥、そして人間の体にまで入り込む。信じていた「エコ」は、実は環境を傷つける存在だったのか。母も私も、言葉を失つた。

しかし、落ち込んでばかりもいられない。私たちは気を取り直して、別の糸で作つてみる

東京学芸大学附属世田谷中学校 2年

太田 綾音



優しさを編み直す



受賞を知った瞬間は、うまく態度に示せませんでしたが、実はとてもうれしくて表彰式が楽しみでした。講演会や懇親会で聞いたお話、「エコルとごし」での学びなど、知識や情報を手に入れられたので、自分のものにしていきたいです。

アクリルたわしは環境に優しい。私はそう信じていた。アクリル毛糸を編んで作った工コたわしは、細かい繊維が油をよく吸着し、洗剤をあまり使わずに済む。母も環境を思い心地、耐久性を比べた。すくと、綿で作られたものが、総合的に見て最も優れていることがわかった。

私もそれを誇らしく感じていた。実験を終えた私は、綿のエコたわしを皆にも使って欲しいと思った。各家庭の毎日の小さな変化が、地球の未来を少しだでも守ることができるかも

しれないからだ。では、どうすれば綿のエコたわしを、日々の暮らしに浸透させることができかかるか。

まず、学校生活にエコたわしを作りを取り入れてはどうだろう。例えれば家庭科の授業で、私たちが行つたような実験をしてみる。ただ作るだけでなく、環境対策の評価は時とともに変わる。だからこそ、その都度確認し、より良い選択を重ねる必要がある。「未来につながるエコ」を探す新たな歩みを踏み出すことをやめなけれ

ば、地球に優しい社会が、きっと待つているに違いない。

力を入れて実験したり、提案を考えたりしたので、受賞は驚きましたがうれしい方が大きかったです。滝沢さんの講演を聞いて、これまで私はごみについての知識や興味がなかったなど気づき、絶対に改善していきたいと思いました。

受賞した
感想

公益財団法人 イオンワンパーセントクラブ

第23回 中学生作文コンクール



見えないエコ、見つけた！

広島市立国泰寺中学校 3年

小林 巴菜

先日、私が携帯を見ていると、母が「データを消すだけでエコに繋がるって知つとつた？」と言いました。私は携帯の使いすぎが目に悪や、依存しすぎはよくないという話は聞いたことがありました。

が、保存している写真や動画のデータが環境に関係しているのを初めて知つて、とても驚きました。私は気に

なつて調べてみました。

スマホやパソコンに保存されたデータは、多くの場合、クラウドと呼ばれる場所に保管さ

れていて、そこでは大量の電気を使って情報を処理してい

るそうです。その仕組みを支

えて、そこでは大規模な施設です。そこ

はコンピュータが二十四時間動いていて、冷却のための空

調設備もずっと稼働していま

す。これらすべてに使われる電力の多くは、火力発電などの方法で作られていて、大量の二酸化炭素を排出していま

す。私たちが、携帯の中に何

かが、保存している写真や動画のデータが環境に関係しているのを初めて知つて、とても驚きました。私は気に

なつて調べてみました。

「消しエコ選手権」をしまし

た。家族みんなで必要のない

スマホやパソコンに保存され

たデータは、多くの場合、クラ

ウドと呼ばれる場所に保管さ

れていて、そこでは大量の電

気を使って情報を処理してい

るそうです。その仕組みを支

えて、そこでは大規模な施設

です。これが、私たちが、毎年協力して開催して

いる「データセンター」と呼ばれる

「データセントラル」と呼ばれる

「データセントラル」と呼ばれる</

公益財団法人 イオンワンパーセントクラブ

第23回 中学生作文コンクール



『さらば、ビニール傘袋』

愛媛大学教育学部附属中学校 2年

弘松詩菜



みなさんの家にエコバッグはいくつありますか？今は買い物の際にエコバッグを使用する人が多いと思います。これはどの程度エコに繋がっているのでしょうか。

我が家の場合、以前は買い物の際にレジ袋をもらつて、荷物を袋から出したあとは生ごみを入れる袋として第二の役割がありました。今はエコバッグを使うので、生ごみのために袋を購入している。母の周りでも大きなごみ箱に捨てる前に一旦レジ袋サイズの袋にごみをまとめるので購入している人が多いそうだ。第二の役割があるレジ袋。それに比べて傘袋ってエコじゃないと思う。私は常々雨の日に商業施設の入口で散らばる傘袋を見てモヤつとしていた。濡れた傘から落ちる水滴で床は滑りやすくなるし、汚れる。衣類にも水が付く。だから傘袋は必要である。たしかにそしだが薄い傘袋はうまくはがれず一枚とるつもりが二枚三枚くつづいている。知らない分は横のごみ入れ

に捨てる。ちゃんと一枚とつても傘の先が突き出て穴があき、またもう一枚使う。一枚だけ利用もできないのでその場で捨てて帰る。これをなんとかできなかたと考えていた。

私は愛媛大学のジュニアドクターに参加している。私の研究テーマは傘の水滴を落とす（ズボンプレス機のような）装置を販売している会社もあるのだが導入している施設は少くない。傘袋よりエコなのに普及していない理由として、メンテナンスが必要という設置側の意見と布との摩擦で傘が傷みそうという使用者側の意見があることがわかった。

私は研究において、まずは使用者側の意見を優先することにした。摩擦で傘の生地や骨が傷まないものを考えた時

ではなく人力でできる物を作り出せたらと考へた。昔の足踏み脱穀機をイメージして一年目の研究で試作品を作ったがエアがうまく出す水滴を飛ばすのとはほど遠い出来であつた。二年目の今年も試行錯誤を繰り返しているがまだまだである。

私の研究が傘袋の無駄をな

くす将来に繋がる可能性は低いかもしれない。だが、普段の生活の中でモヤつとしたことを流さずに自分の中で突き詰めて考えることもエコ活動の一つか。

講演会での滝沢さんの話を聞いて、自分も環境のために何かできることが増えたらいいなと思いました。傘の水滴を落とす道具の開発はまだ続いている、なかなかうまくいかないけれど、いろいろな方向から試していくたいと思っています。

受賞した
感想



小さな循環型社会

都城市立姫城中学校 3年

北郷優斗



宮崎県に移住してから、私も暮らしにはいつも「ニワトリ」と「糞」があった。このプロジェクトは、決して他の誰かが言い出したことでも、親の手伝いでもなく、小学三年生の頃から私が黙々と続けてきたものだ。多くの人が環境問題は「大きなもの」と語るが、私は毎日二通りと土と向き合う中で、気候変動やごみ問題といった深刻な課題を、とても身近なものだと感じている。きっかけは、小学二年生のときに学校で育てたミニトマトの味が忘れられず、「自分で食べる野菜を自分で育てたい」という単純な思いだった。移り住んだ曾祖父母の家で、私は、家の土を活かした野菜づくりをしようと決めた。何度も失敗を繰り返すうちに、この土地で採れた野菜から自家採種したタネは、驚くほど元気に育つことを発見した。畑の栄養は、台所の生ごみを活用したコンポストと、三年前から飼い始めた二ワトリの糞尿でまかなう。こう

に、空気を活用して水分を飛ばす麺の自動湯切り機を参考にしたが、メンテナンスや維持費の問題もある。そこで、電動車両を地域の空き地などに貸し出すことを始めた。最初は

が互いに助け合う「循環」が静かに回っている。
ニワトリは、私の環境活動を大きく広げてくれた存在だ。二ワトリを飼い始めた当初、害獣に襲われる悲しい出来事がありましたが、その悔しさから、私はニワトリを徹底的に守るために、JR西都城駅前に設置した。その中で、ニワトリの「雑草を食べ、土を掘り返す」という習性を活かして、底のない移動式の鶏小屋、通称「チキントラクター」を開発した。このチキントラクターを畑に置くよ

うになつて、私は都城が抱える意外な環境問題に気付いた。家庭内の循環から地域の課題ごみ捨て場に山積みになつた、大量の雑草ごみだ。また、地域全体の高齢化が進み、雑草の処理に困っている人も多い。この現状を目の当たりにし、「私のチキントラクターが、この地域の課題を解決できるかもしれない」と考へるようになつた。

そこで私は、チキントラクターを地域の空き地などに貸し出すことを始めた。最初は

「こんな狭いところにニワトリを入れてかわいそう」という声を耳にした。その指摘を受け、私はすぐにニワトリが快適に過ごせる広さを調べ、運搬しやすい組み立て式に改良すること

で、この問題にも向き合つた。JR西都城駅前に設置した際には、通りすがりの人が、ただ静かに雑草がなくなつていく様子を眺めているのが見えた。

私のプロジェクトは、小学三年生の頃にたつた一人で始めた小さなものだつた。しかし、ニワトリとの出会いをきっかけに、

生との興味とはかけ離れていたが、少しずつ関心を持つてくれるようになった。私の小さな循環型社会は、地球の未来と地域の未来が密接につながつて、いることを教えてくれている。

私はこれからも、自分ならではの視点で、環境問題と向き合つて、いきたい。

受賞した
感想



受賞はとてもうれしかったです。作文は書きたい内容がたくさんあったのでまとめるのが少し大変でした。講演会は、滝沢さんの「ごみを資源として有効活用する」という考えが私の取り組みと似ていると思い、感銘を受けました。

公益財団法人 イオンワンパーセントクラブ

第23回 中学生作文コンクール



今の私にできること

いわき市立泉中学校 3年

泉中学校 3年
まつ うら り お
松浦里緒



捨てる油で空を飛ぼう！

東京学芸大学附属世田谷中学校 2年

谷中学校 2年



大切なサーフボードに大きな穴が空いてしまいました。私はそれを見て、とても悔しくて、涙が出ました。それと同時に、この状況を深刻に感じ、今海で何が起こっているのか、興味を持ちました。

今、私は地元で、同じ趣味をもつ仲間と共にビーチクリーンに取り組んでいます。ビーチクリーンをする事で、砂浜にあるごみを少しでも減らす事ができ、そのごみが海に流れていくのを防ぐ事につながります。他にも、ごみの分別をしたり、ペットボトルや食品トレーはリサイクルに出したり、エコバッグを持ち歩いたりするなど、私たちにできることは、

多くの人にこの問題を広めた
り、活動したりして、少しでも
SDGsに貢献できるよう
頑張っていきたいです。

**受賞した
感想**  昨年の夏休みは、英語弁論大会の原稿とこのコンクールの作文で2回、サーフィンを通して考えた海の環境問題について書きました。周りの人には「夏休みにがんばっていたので、受賞できてよかったです」と言われました。



と航空会社と手を結び、2024年3月に開始した。当初は、家庭用油の回収が始まって間もなかつたこともあり、認知度も低かった。

「家庭用油で飛行機なんて飛ばせるの？」

去年の私は半信半疑のまま、食事の準備で出た油を集め始めた。当然だが、回収する油は不純物のないものに限られるため、一度の使用量の半分くらいしか残らないことも

私は海が大好きです（小学
生の頃からサーフィンという
競技に熱中しています。
ある日の放課後、私は地元
である、いわきの海で大会に向
けて練習していました。浜辺
のひんやりとした冷たい砂、し
ぶきを上げて崩れていく波の
音、海面にぼんやりと映し出
される夕日、全てが私を優し
く包み込んでくれました。波
に乗っていると、突然大きな何
かにぶつかってしました。

い時間をかけて分解されるため、2050年には海に住む生き物の重さより、海洋プラスチックは最終的に細かくなり、「私たち人間に体内に取り込まれる」という事が分かりました。私はこの事実を知り、今までは、自然と調和した生活が送れなくなるかもしれない、と思いまして。また、海自身が叫ぶことは

私は、ビーチクリーンをしている時、落ちているごみが多くて、「本当に自分は力にならぬているのか?」と思うことがあります。自分の今の体力では何ともできない歯痒さを感じるのです。ですが、仲間と共に活動したり、この問題を学ぶにつれ、それを通して、「小さいことでも、一人一人が自分でできる事に取り組んでいく事は、大切な事」と気

今年に入りてSAFといふ言葉をテレビCMで見聞きすることが多くなつた。SAFとはSustainable Aviation Fuelの略称で、持続可能な航空燃料の意味である。家庭用の使用済み油を回収し、航空機の燃料として利用することでCO₂排出量を削減するという取り組みだ。我が家では昨夏SAFのプロジェクトの存在を知り、取り入れ始めた。

今年に入りて「SAF」という言葉をテレビCMで見聞きする人が多くなった。SAFはSustainable Aviation Fuelの略称で、持続可能な航空燃料の意味である。家庭用の使用済み油を回収し、航空機の燃料として利用することとでCO₂排出量を削減するという取り組みだ。我が家では昨夏SAFのプロジェクトの存在を知り、取り入れ始めた。

このプロジェクトは「Fly to Fly Project」について、石油工業協会が東京都と航空会社と手を結び、2024年3月に開始した。当初は、家庭用油の回収が始まって間もなかつたこともあり、認知度も低かった。

「家庭用油で飛行機なんて飛ばせるの?」

去年の私は半信半疑のまま、食事の準備で出た油を集め始めた。当然だが、回収する油は不純物のないものに限らねばならぬ。そのため、一度の使用量の半分程度しか残らないことも

今年は「一年間で8リットルを回収する」という目標に挑戦した。倍の数字に設定した理由は、家族全員の意識も高まつて作業にも慣れてきたこと、それに加え回収場所は横浜市と遠く、気軽に運びに行けなかつた。それが、今年五月から都内に設置場所が一気に増えたことでより身近に利用できるようになつた。東京都が主催する回収キャンペーンやPRイベントが行われることが回収場所増加につながつた。実際に都内の回収場所に行くと、去年は誰もいなかつたBOXの周りに、今年は興味深そうに覗き込む家族連れの姿が増えていた。現時まで既に3リットルを回収場所に運んだので、順調にいけば目標は大きくクリアできそうだ。こうした行動で、日常生活の中で自然にエコ活動が

きるようになってきたと感じている。この夏休みに、旅行で羽田空港を利用する機会があつた。空港で読んだ航空会社のパンフレットに「Fly to Fly Project」についての記事を見つけて心が弾んだ。記事の内容は、回収した油を大阪府の製油所で国産 S A F として量産し、ついに 2 0 2 5 年 7 月、羽田空港の定期便に配給が開始されたというものだつた。まだまだ実用的に運用されるのは先になるそうだが、着実に、確実に、自分のエコ活動が未来に繋がっていることが実感できたことがうれしかつた。「みんなで飛行機を飛ばそう！」今は本気でそう思っている。将来、このプロジェクトで飛ぶ飛行機に乗つて旅行するのが、昨年からの密やかで大きな夢だ。それは十年後？ 二十年後？ どんな社会になつているのだろうか。今からとても楽しみである。



公益財団法人 イオンワンパーセントクラブ

審査員からのメッセージ

審査員から作品を読んだ感想や講評をいただきました

審査員長 教育アドバイザー 清水 章弘

中学生が書いてくれた作品をたくさん読ませてもらいました。なかなか差がつけられない、そんな中でみなさんの作品が選ばれました。努力や行動の差もあるけれど、一番は「運」だと思います。運良く選ばれた人には、次に挑戦していく責任が生まれるのではないかでしょうか。中学生には勢いがあります。その勢いを使って、活動を発信したり、大人から吸収したりして、次の一步を踏み出してください。これから活躍を祈念しています。

お笑い芸人 兼 ごみ清掃員 マシンガンズ 滝沢秀一
環境省サステナビリティ広報大使

私は人生において大切にしていることが三つあります。一つは「体を使って勉強すること」。体で覚えたことはしっかり刻み込まれて忘れません。そして、目の前にあることが本当にそうなのか「疑うこと」。考えるのが大事ということです。最後にそれを「分析すること」で、自分の考え方を構築していくのではないかと思います。あなたの作文には小さな芽が出てきました。これからどうやって伸ばしていくのかを楽しみにしています。



作家 汐見 夏衛

みなさんは約1200字という長い文章を書くことができました。しかも内容の濃いものを書ける力がある。それは一つの才能だと思いますので、大事にしてほしいです。みなさんの作文からは、ご家庭の様子が垣間見えました。家族で環境問題について考えながら生活していて、エコ活動が身に染みていることを感じました。勉強になりましたし、私も環境問題についてしっかり考えなきゃと思う審査でした。すてきな機会をありがとうございました。



朝日学生新聞社 取締役会長 高田 圭子

審査の際に心がけたことは、「一步踏み込んでいるか」という点でした。ご存じのとおり、環境について知りたいと思ったら、情報はあふれていて簡単に調べられますし、AIがそれっぽいものを書いてくれます。そんな時代に、どんな意識を持って考えたり、実践したりしているか、その先をちゃんと書けているかを見ました。みなさんはそれができます。この先も、リアルを表現するという意識を持って羽ばたいてほしいです。



受賞の副賞として 環境エコツアーにご招待

都内のエコスポットで見て、触れて、話して、食べて考えた!



訪れたのは自然豊かな公園内にある品川区立環境学習交流施設「エコルどごし」。館長らの案内で館内を見学しました。

エコルどごしの建物は環境にやさしい「ZEB」関連設備を備えています。「太陽光パネル」で作った電気を「蓄電池」という

見学した後は、持続可能な開発のための

教育推進会議（ESD-J）代表理事の鈴木克徳

壁にタッチすることで、使い過ぎの資源、ごみを減らす方法、再生

可能エネルギーを学びます。常設展示「トイカケノジカン」は1秒、1日、1年、10年をキーワードに、身近な視点で環境について考

えることができます。

環境学習施設の見学とワークショップ

大きな電池に蓄え、夜間の照明や災害時に使うといった取り組みです。

東京都内をめぐる環境ツアーオーを出発しました。さまざまな体験を通して交流を深めながら、環境についてより広く、深く考えて新たなアイデアを得ました。



生は「物を大切にする」「食品ロス」などのテーマを議論しました。中学生は「物を長く使い続けってごみを減らしたい」「ごみの未来を考えることが大事」など、自分たちの考えを述べ、ほかのグループの意見に耳を傾けました。

丁寧に調理されたマチルダ（じやがいも）のポタージュや大根の煮物などに舌鼓を打ちます。驚きの声が上がったのは「採

5グループ、保護者は3グルーに分かれて、自由テーマでディスカッションをしました。中学生は「物を大切にする」「食品ロス」などのテーマを議論しました。発表では「物を長く使い続けってごみを減らしたい」「ごみの未来を考えることが大事」など、自分たちの考えを述べ、ほかのグループの意見に耳を傾けました。

昼食は港区赤坂にあるオーガニックレストラン「WE ARE THE FARM 赤坂」で取り



ました。この店は自分たちの畑で作った無農薬・無化学肥料の野菜を提供しています。

WE ARE THE FARM 赤坂



公益財団法人 イオンワンパーセントクラブ

イオン1%クラブの活動紹介

「お客様からいただいた利益を社会のために役立てる」という想いのもと、

イオングループの主要企業が税引前利益の1%相当額を拠出し、

子どもたちの健全な育成 諸外国との友好親善 地域の発展への貢献 災害復興支援

を主な事業領域として、環境・社会貢献活動に取り組んでいます。



子どもたちの健全な育成

環境・社会をテーマに、子どもたちが社会的なルールを学びながら身近な地域の問題を主体的に捉え、考える力を育てます。



諸外国との友好親善

学生たちに国際的な文化・人材交流の機会を提供し、相互理解を深めることで日本と諸外国との友好親善を深めます。



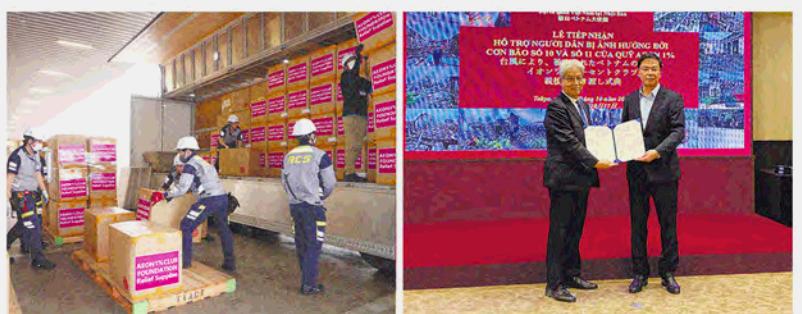
地域の発展への貢献

地域に根ざし、次代に引き継ぐべき伝統行事や文化の継承を支援するとともに、地域社会が抱える諸問題の解決に取り組みます。



災害復興支援

大規模災害により被災した方が、日常の生活を一日でも早く取り戻せるよう、復旧・復興を支援しています。



イオン チアーズクラブメンバー募集中!
入会金・年会費無料

「イオン チアーズクラブ」は、小学生を中心とした全国のイオングループの店舗等を拠点に、約540クラブが環境や社会貢献をテーマに体験プログラムを行っています。



詳しくはこちら

イオンワンパーセントクラブ

検索

